「徳育（心の教育）を考える」

吉田　順一

―若い真摯な教育集団・生徒保護者会での「教育談話（平成十年）」の一部より抜粋―

この国の教育は、今後一体、何から子供たちに教えるべきかということがいろいろな場で論じられています。その時、必ず「心の教育」ということがとり上げられ、そのためには道徳教育（徳育）―道徳心の有る情操豊かな人間性を養うための教育―が特に大切であることが、これまでの教育の反省としてとり上げられるようになってきています。

道徳心を子供たちにつけさせることの大切さは、今に始まったことではありませんが、学校で子供たちに道徳を教えるだけで道徳教育が出来るということではなくて、その前に、子供たちが育っている私たち大人社会こそが、先ず道徳、倫理を取り返さなければならない現状に直面しているわけですから、徳育というこ

とは実際には時間のかかる大切な教育作業の一つです。
しかしいかに難しい問題であるからといっても、どうしても学校という場で、道徳を子供たちに教えることが焦眉の大事な問題であることは、いま多くの心ある人々が真剣に考えていることだと思います。

ＩＴ革命に始まり、経済機構の変革、グローバリゼーションという、波浪の中で、とにかく急がねばならない、後れをとっては負けるというあせりの激流に翻弄され、その方式のみ先走りして、それらを社会に生かし適応させなければならない大人が、「道徳」「倫理」という社会の根幹である土壌を失くしてきているために、考えてもみなかったこの国の荒廃と混迷をひき起こしてきていることは、今更かさねて繰り返すこともない現状です。

しかし、そうだからと言って、もうどうにもならないと言葉もなくただ悲観に立ち尽くすだけでは、大人としての責務を逃れることになってしまいます。

では一体どこから手をつければよいのだろうかーと、その現状に正対し、この国の教育を立て直し、安心で平和に生きられる社会・国家を子供に残すために、勇気を持って努力を積み重ねて行くのだという意欲をもつことが、今この国の教育に携わる者としての責務です。

学校教育の中でも「道徳教育（徳育）」ということこそ、最優先されなければならない切迫した課題であることは。心ある人々は考えているはずです。

ここでは「中等教育」というごく狭い範囲での「徳育」という具体的な作業を取り上げてみたいと思います。

昔からある時代までは、この国では「道徳」ということは、言葉の深い意味は別として十歳前後になると漠然と教わっていたように思います。私たちが小学生の頃には道徳は“修身”という言葉に置き換えられたりもしていました。それは学校の修身の時間に習う言葉からだけでなくて、家族とか周りの大人たちの日常の言葉や行動から自然に教えられる躾のようなものでした。

道徳とはーということを、改めて教えられたり聞いたりすることがなくても、日常の生活習慣の中で自然に教えられていたと思います。道徳という言葉は使われなくても、家族や学校で、行動、作業、心の持ち方という日常の生活の中で日々教えられ、ごく基本的なことは、少しずつ身につけていたわけです。少なくとも、古き良き時代の日本という国では、大人もそういうものを身につけていたことを、当時日本に来た外国人が、いろいろな書物に称賛して書かれていることを、読まれたことがあろうかと思います。

一般的に云って、今この国では「道徳」とか「倫理」という言葉を改まって聞くと、それだけで、何かある種の「堅苦しさ」とか「窮屈（きゅうくつ）さ」のような感じを受ける人が多いのではないでしょうか。それは、人間は元々何物にも束縛されなく自由に気楽に生きたいーという本能的なものを持っているからだと思います。自分の考え方や行動を、一つの決まった型にはめられるのは、何となく拘束されているような気がして、深くそのことについて考えることもなく、道徳という言葉そのものを堅苦しく感じ、漠然とした違和感を持っているのかも知れません。中には、この思いが深まって、道徳という言葉から少し逃げ腰になったり、何か違和感のようなものを持ったりする人々がいるかも知れません。

つまり道徳という言葉が、表面的に「何々してはいけない」「こうしなければならない」というようにすべて自由を縛ってしまうということだけに受け取られるところに、道徳というものを学んだりすることへの、若干の違和感が、現代人の道徳観の中にあるのではなかろうかと考えられます。

しかし、よく考えてみますと道徳はそのように人間生活を抑制するものではなくて、文明社会ではそこに生活する人が守らなければならない「法律」というものが表面に一つの層となっており、その下に道徳という層があってはじめて健全

な社会という土壌が築かれ、この二つのものが互いに有機的に機能することで、私たちが生きる社会の秩序が保たれ、人々が安心して生活できるようになることは、少し考えれば誰もが理解できることだと思います。

ここで道徳という言葉を、因みに辞書を見てみますと、次のように書かれています。

―人々が善悪をわきまえて正しい行為をなすために、守り従わねばならない規範の総体。外面的物理的強制を伴う法律と異なり、自発的に正しい行為へと促す内面的原理として働く（大辞林）―このように書かれています。

表現が難しいので一応参考にしていただければよいと思いますが、要約すれば、道徳というものは一人間がこの社会で安心して暮らしてゆくために、どうしてもなくてはならないルール・決まりであって、これを守ることで、初めて人間が、人間として価値のあるものとなることができるものーということになろうかと思います。このように考えてみますと、道徳（倫理）ということは、それほど堅苦しく人間の行動を縛りつけるものではないことがわかってくると思います。

確かに、ある場合道徳は、私たち人間が本能的に持っている自由、本能のおもむくままに行動しようとする欲求を抑えたり、そこからくる行動を規制したりす

ることはあります。それは人間が、ほかの動物とは違って高度な文明社会を構成しており、その集団の中で生活し暮らしているからです。

深山幽谷に野生動物のように住んだり、大海の孤島に一人で生活したりするのであれば別ですが、普通の人々は、人と人とが集まって社会を作りお互いに支え合って生きるわけですから、自分の欲望だけ満足させ、自分勝手に思うがままに生きるということになれば、自分も周りの人々も一日も生きられなくなることは明らかでしょう。

このようにして私達人間が生活している文明社会は、根柢の基盤となるところに長い間かかって私達の祖先から伝えられてきた習慣とか慣習というような道徳があります。そしてそのしっかりした基盤の上に、その道徳というものを基準、つまり物指しとして色々と細部に亘ってとりまとめられた、法律というものが作られているわけです。

これが人間社会での道徳のおこりだと考えれば誰にも理解できると思います。そしてこの道徳を基準として法律がつくられ、その法律が守られて初めて自分たちが安心して暮らすことができるーそうすることで本当の自由が得られるということを、人間は段々と進化するにつれて他の動物より考えることができるように

なったということが、人類が生き延び進化してきた理由の一つに違いありません。

この地球上で、生き残ってきた、他の動物にない人間の持つ叡智の中から、自然発生的にこのような取り決めが生まれ、それを守り育ててきたからこそ、人類は万物の霊長と言われるようにここまで進化してきたのです。

道徳は、決して人間の自由を妨げるものではなくて、私達が真の自由を享受するためには、なくてはならぬ大事なものとなるわけです。

アメリカで一九九三年に出され、欧米で膾炙したと言われる「The book of Virtues（W・Jベネット）という本の中でこの通俗的、普遍的な誰にでも分かり易い徳目として次のようなものが挙げられています。

一・　自分に厳しくなる（自己規律）
二・　人にやさしくする（同情）
三・　やるべきことを成し遂げる（責任感）
四・　友達を大切にする（友情）
五・　一生懸命働く（仕事）
六・　困難に立ち向かう（勇気）
七・　つらさを乗り越える（忍耐）
八・　素直な心を持つ（正直）
九・　誠意を持ち続ける（忠誠心）
十・　神を信じる（信仰心）

この徳目はとても分かり易く、昔から日本でもすでにずっと教えられてきたものです。この様な一見平凡な徳目を、教室で日々子供たちにくり返し伝えること

から、まず「徳育」を始めなければならないと考えます。

日本では、儒教（孔子・孟子）の教えや仏教が、道徳教育で教える徳目の基となってきているわけですから、道徳ということ自体の説明も難しく、そして実際に学校現場で道徳をどのように具体的に教えるかということも、徳育の難しいこととなってきているようにも思います。

こうして道徳は、ずっと昔からその社会に伝わってきたもの、つまり習慣や慣習のようなものに始まり、日常の社会生活の中で守らねばならない、「具体的な取り決め」のような複雑なものに進み、しかもそれらは人間が生活する社会によって異なっているものもありますし、さらにそれらをまとめた、抽象的な法律やそれに近いものにまで広く深く多岐にわたるものとなってきたわけです。

このために、その定義も一元的なものでは不十分であり、さらにこの道徳を教えるということになると、実に困難な、考えるだけ高度なものである事がわかってきます。

道徳ということの、ごく表面の輪郭を考えてみるだけでも、このように深遠なものであり、さらにこの道徳を学校現場で教えるとなると、いかに難しく、そして大切なことであるかということがわかります。

古代ローマの哲学者セネカ（ストア派 前四～後六五・道徳を説き実践哲学を主張）は、「徳は教えられない」と言ったと聞きますが、道徳ということの深い哲理を知る思いがします。

これは、道徳は教える事が出来ないという事ではなくてー道徳は、人間が生きる上で欠くことの出来ない大切なものであるし、人間が身につけなくてはならないものであるが、その徳目をただ言葉によって伝え、教えるということだけではなくて、むしろその道徳を教える者の道徳心、道徳的な行為行動の実践によって、はじめて道徳を教わる者に伝わり、感化する事が出来るものであるーという訓えだと考えれば、教師は先ず自分が道徳を学びその徳目を身に付ける事から始めねばならないという教訓である、と受け止める事が出来るわけです。

ここで、現在学校で行われている道徳教育について見てみますと、二〇〇八年の時点で学校での道徳教育の時間は、小学校、中学校には「道徳という時間」として学習指導要領で定められたものがありますが、高校には定められた単位としての時間はありません。

中学一年生で年間三四時間（週一時間）、小学二年生～中学三年生で三五時間がカリキュラムの中に取り入れられています。その教育内容は、各学校で選定され

た副読本を使って道徳を教えるということになっています。高等学校では正式に学習指導要領に決められた道徳という教科はなくて、「道徳教育は学校でなされる教育活動全体を通じて行う」というようになっています。

高校では「公民」という教科の中で担当教員が道徳に関するような事も教えているのが実情のようです。

このような事を考慮した上で、徳育として学校現場で教師が出来得ると思われる事は、本質的な事から言えば、すべての教師が先ず生徒に物事を教えるという仕事の基幹となる教師としての「基幹教育力」を培う事であると私は考えています。この基幹教育力ということは、自分の教える教科の知識、それを子供達に理解させる技術を充分身につける事です。

教壇に立つからには、勿論教師としてそれらは身につけた上で教職に就いているわけですが、更にその上に、経験を得て分かってくることですが、教えるための知識、技術はいくら研究しても尽くせないものがあるはずです。

授業を受ける生徒が、この先生は一生懸命教えてくれる。―この先生の授業はよく分かる。この先生は、どんな質問にも答えられる力を持っている―という教師が、生徒にとって大切な基盤となるものです。

教師は、生徒にとってどのような存在であるように努力する教師が、よくできる子、できない子、やる気のある子、ない子―どのような子供にも、真正面から向き合い、それぞれに知識、技術をつけるために、真面目に、誠実に、忍耐強く一生懸命に努力する姿―この事自体から徳育という事が始まるわけです。

この教師の仕事に対する姿そのものが人間性の感化であり、それが道徳教育の一つの柱となるものです。道徳の徳目を言葉で教える前に先ず道徳教育には、このような教師の在り方自体がどうしても大切な事になってきます。

こうして子供たちに、学習への歓び、意欲を引き出すと共に、勉学への希望を引き出そうとする真摯な姿は単なる知育ではなくて貴重な徳育とも云えるわけです。その上で子供たちから信頼されている教師が、道徳という事を、常識として人間社会になくてはならない普遍的な徳目として、書物で体系的に教える時間が、中学・高等学校の教育においてなくてはならない徳育の作業です。

人間として何が正しくて、何が正しくないのか という事から始まって、物事の価値観、守るべき規範という事を文字や言葉でもって教える事がともに行われなければなりません。その為には、高校でも週一回は「道徳」の時間を設定し普遍的な「道徳」教科書を作成し、生徒たちに必修させることです。

このようにして学校での徳育の一面は教師が真剣に生徒に学力・知識をつけるという事にもあるわけですから、知育も道徳教育も学校現場では根底において一つのものになってくるのです。

アメリカで出版された一冊の本に「ＥＱ」という言葉が使われています。これは一九九五年にアメリカのＤ・ゴールマンという心理学者が著わした、英語の原題は「EMOTIONAL INTELLIGENCE why it can matter more than IQ」という書物が全米でベストセラーとなり、これが日本語に翻訳されて「ＥＱ 心の知能指数」（土屋京子訳・講談社）の書題で出版され日本でもベストセラーとなって非常に多く読まれました。「ＥＱ」は、この書物から使われ始めた言葉です。

こうして「心の教育」ということと深くつながるものとして、この「ＥＱ」という言葉が取り上げられていましたが、道徳教育という事を考える時に、ここで改めて取り上げてみたいと思います。

もともとこの本は当時流行語だった［ＩＱ］と対比させるために「Emotional Intelligence Quotient」として「ＥＱ」という言葉を使い、「心の知能指数」としたようです。

ところでこの Emotional（エモーショナル）という語は「感情の・情緒の」とい

う意味ですから、外からは見えない心の分野の「情感とか感性の知能、理解力、思考力」という事を指しています。このようにこの書物に述べられている教理は、日本民族がずっと長い間、持ち続け、それらを根底において、この国を創り上げてきた道徳や倫理の徳目に相通ずるものがありますから、この本を手にして、人々はどこかに置き忘れていた大切なものを、外国の書物からふと思い起こしたのではないでしょうかーその為に非常に多くの人々に読まれたのだと思います。

心の知能指数だと説く「ＥＱ」の根幹となるものは、「情動の自己認識（自分自身の気持ちが分かっていること、その能力）であり、それが次にその感情をうまく制御して正常な状態にいつも保つこと（自制）が出来る能力である」と説かれています。

確かにこのような能力は、徳育を考える時とても大切なものであり、教師として現場で仕事をして子供たちを見ている者にはよく理解できることで。深く共感するものです。

ＥＱ論はさらに具体的に次のようなものを習得することであると分かり易く説明されています。

（一）情動の自己認識・自分が心に受けた衝動をコントロール・抑制する能力

（二）自利愛他主義・他人に対する理解、共感
（三）人格的知性・自分自身の人格、品性
（四）社会的知性・規範、倫理、道徳を習得し集団の中で調和し協力し合う能力

となります。

これを見ますと、日本の社会でも昔から「知徳一体・情理円満」ということが人「徳育」の究極の理想として伝えられてきましたが、まさに相通ずるものがあります。著者の主張されるように、人間に身につけなければならない基本的な倫理・規範はＥＱの基盤の上に成立しているものである事を理解すれば、モラル（道徳）という言葉は使われていなくても、見方を変え言葉を変えて、道徳を易しい言葉と表現で教えていることがよく分かります。

アメリカの、碩学の心理学者から日本古来の「徳育」というものの価値を、言葉と表現を少し変えて、あらためて伝えられる思いがします。

「やぶにらみ郷土史」

杉本　彰

土佐ではいつのころか中央で成功し、活躍するのが青年達の夢となったようである。坂本龍馬がその一番手であろうか。

高知大学の前身である旧制高知高校も中央で活躍する人材の養成機関として多くの立派な人材を輩出してきた。

土佐中出身の元三菱電機の社長のご尽力により同社の工場が誘致されたり、南国市出身のカシオ電気会長により同社の南国工場ができたりして、地域づくりに大いに貢献されているのはまことに有り難いことである。

また、県内においても創造的な仕事をして華々しく成功し、県外はもとより世界に打って出ている企業もある。たくさんある中で上場している次の三社をあげよう。

1・ニッポン高度紙工業

電気絶縁用セパレーター紙の製造。昭和四十年頃、高知市旭町で岡田社長と私の高知大の同窓の市川専務のコンビで小さな抄紙機で紙を漉いていた。岡田さんは明るく研究熱心で、市川専務と春野工場と安芸工場を完成させ、今は二人とも

故人となられた。最近、鳥取県にも工場ができ、ますます発展している。

2・技研製作所

油圧式杭圧入引き抜き機等の製造。昭和四十年代後半、杭打ち等の業務をされていた北村社長が高知のエジソンと云われる故垣内さんとコンビで無振動、無公害の油圧式を発明をし、企業化して世界に向けて販路を広げ発展している。

3・兼松エンジニアリング

環境整備用特装車メーカー。強力吸引、高圧洗浄、汚泥吸引等の作業車等。故大谷社長は私と同じ会社で研究成果を企業化する際、工務部から私を支えてくれた人である。積極的で、リスクを恐れず、前へ進むタイプであった。

自分はいろいろ経験して事業を興すと常々いっていた志の高い人であった。社長になり、これからという時に亡くなられたのは真に惜しまれる。

前記の三社を起こした人々に共通しているのは、決してエリート教育を受けた人ではなく、汗にまみれ、泥にまみれて仕事をしている志の高い人達であったような気がする。

歴史的に見て、この土佐において、創造的に地域づくりに貢献した人物は野中兼山ではなかろうか。現在でも、この人物によるものと思われる構築物が数多く

残っている。
兼山は有能な行政マンとして、また技術者として営々と努力し、國造りに励んだ結果、理由はともあれ、彼の働きによって最も大きな利益を受けた藩から目を覆いたくなるような仕打ちを受けたわけである。
現在、筆山にお城に背を向けた兼山の墓が建っている。

だんだん小説めいてくるが、以来、土佐の青年達はこの地域での創造的な仕事を放棄し、広い中央で活躍する夢にとりつかれるようになったのではなかろうか。
坂本龍馬以来の中央志向は旧制高知高校の存在によりますます強まったように思う。
私が関係してきた電気化学工業の分野を見ても、戦前より高知県と同様に水力による余剰電力が豊富であった他の地域では立派な企業が育っている。例えば、九州では旭化成やチッソ、北陸では電気化学、信越化学、日本カーバイド、中部ではイビデンなど一部上場企業が挙げられる。
昔は四国の八十％の電気を発電していた高知県にこのような企業が育たなかったのは地元出身の志ある技術者がいなかったからではなかろうか。
最近、ようやく高知工科大が設立され自前で技術者を養成するようになった。
高知の業界も前記の上場三社の成功でこれに続こうと活気づいている感じがする。

さて、これから二十一世紀に向かって重要課題の一例をあげれば次のようなことが云われている。

1．環境問題に関すること
2．健康に関すること
3．エネルギーに関すること
4．文化・芸術に関すること

その他にも、いろいろあろうが一つの方向を示していると思われる。企業としてもこれらの中に多くのビジネスチャンスがあるはずである。

県外のお客を待つだけの地域社会ではあまりにもさびしい。健全な製造業を育成することは健全な地域社会をつくる上できわめて大切なことと思われる。

郷土愛にあふれた志の高い技術者を育てる難しい課題がこの高知に突きつけられている。工業品の生産額が全国最下位の汚名をできるだけ早く返上しなければならない。

平成元年、私が勤めていた東洋電化工業（株）が中性紙用炭酸カルシウム及び鋳鉄用脱硫剤の開発で「地場産業大賞」を受賞し、その賞金を故入交一雄社長（入交英雄現会長の兄上）のご厚意により高知化学会にご寄付頂き、「高知化学会5周年誌」が発行された。その際に投稿した文章を一部修正し、投稿させてもらった次第。